

感情と認識の相互作用 — 矛盾情報の統合による他者感情の理解過程 —

望月明恵

(お茶の水女子大学人間文化研究科)

【問題】

情動推測研究の分野の関心の一つである①表情手がかり(facial cue)と②状況手がかり(situational cue)の不一致における情動推測については、これまでにいくつかの先行研究が見られる。

本実験では、「統合できない状態」から「統合可能な状態」にいたるまでに影響すると思われる要因(「手がかり矛盾の認識」「矛盾を説明するスキル」)について検討する。

また、それらの研究では被験者の回答は「統合」「状況手がかりのみを用いる」「表情手がかりのみを用いる」「統合不可能」の4分類が用いられてきた。しかしこの分類では「両方の手がかりに注目しても合理的な感情推測ができない」回答は「統合不可能」に分類され、「わからない」「無言」などと共に「統合不可能」にまとめられる。「二つの手がかりへの注目はできている」回答はどのくらいあるのだろうか。

【実験】

デザイン: 年齢(3:年少・年中・年長)×条件(4:単純矛盾群・単純説明群・矛盾説明群・統制群)×課題(2:P状況N表情/N状況P表情)。課題は被験者内要因。年齢・条件は被験者間要因。

被験者: 都内区立保育園児 123名。年少群(平均年齢4:3) 41人/年中群(5:2) 46人/年長群(6:2) 36人。

材料: (a) 練習試行用絵カード2枚(P状況N表情/N状況P表情)ならびに(b) 本試行用絵カード5×2枚(P状況N表情/N状況P表情)。

手続き: (a) 段階一条件群によって、それぞれ異なる教示操作(単純矛盾群では手がかりの矛盾のみ、単純説明群では理由づけのみ、矛盾説明群では矛盾を明示した上で理由づけを被験者に言語化させた。)

(b) 段階一本試行用絵カードを提示し、描かれている登場人物の感情を推測・ラベリングの後でその理由について尋ねた。

得点化: (b) の本試行の理由づけ回答内容を2名で得点化。2~0(3件法)で2点が「統合」。また、回答を「統合不可能」「表情のみ注目」「状況のみ注目」「2点注目」「統合」の5つに分類した。

【結果】

(I) 統合得点を従属変数とした分析

年齢×条件×課題の有意な交互作用傾向($p<.10$)。よって以降は課題ごとに分析した。なお、P状況-N表情>N状況-P表情($p<.001$)。

*P状況-N表情: 条件群×年齢の異なるパターンが見られた(Figure1.)。

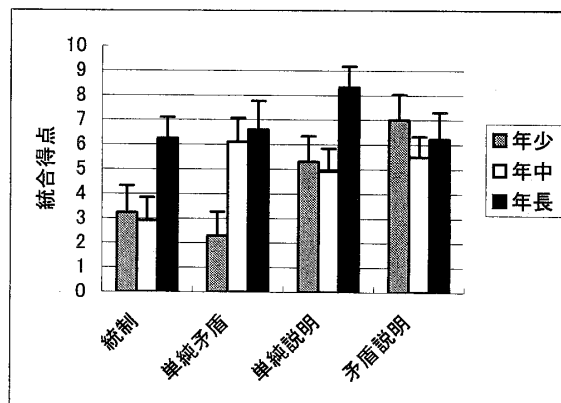


Figure 1. P状況-N表情の統合得点

統制群: 年少≒年中<年長

単純矛盾群: 年少<年中≒年長

単純説明群: 年中≒年少<年長

単純説明群: 年中≒年少<年長

説明訓練群: n. s.

*N状況-P表情…有意差なし(n.s.)

(II) 回答内容を5つに分類した分析

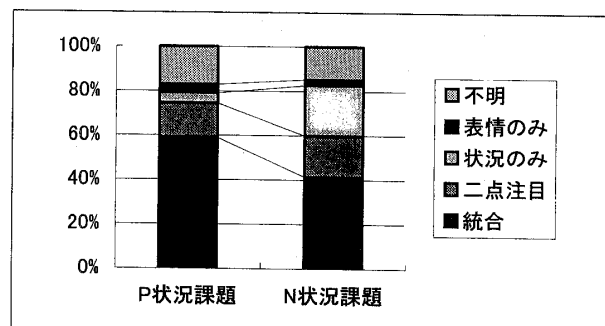


Figure 2. 各課題の回答パターン

【考察】

(I) より、それぞれの年齢において統合に影響する要素は異なると考えられる。認知容量や言語能力の小さい年少児には「矛盾の明示」+「説明スキル」、年少よりも能力が発達している年中児には「矛盾明示」の要素が影響し、3年齢群の中で最も発達している年長児はこれらの示唆を必要としなくなる。また、いくつかの先行研究で見られた課題のタイプによる統合の差は、本実験でも見られ、(II) の分類から、N状況P表情課題では「N状況」が強力な回答基準となっていることが考えられる。